

TOPICS 今号のトピックス

■番組上映会&公開セミナー

「テレビが記録した 3・11から4年～東日本大震災・福島原発事故を忘れない!～」

■公開トークショー 第12回人気番組メモリー『オールナイトニッポン 70年代同窓会』

■西銘総務副大臣が放送ライブラリーを視察&民放・NHK合同番組上映会ほか

■第1回理事会・定時評議員会で26年度事業報告、決算を承認

■番組上映会&公開セミナー

『テレビが記録した 3・11から4年～東日本大震災・福島原発事故を忘れない!～』

■被災地元局5社とNHKの力作を上映

東日本大震災・福島原発事故を伝えたテレビ番組を題材に、番組上映会&公開セミナーの5回目を、3年ぶりに会場を横浜に移し開催した。番組上映会は、3月10日から21日まで、被災3県の地元放送局の5番組とNHKの番組で、11日間にわたって上映された。いずれも被災地の現状を伝える力作だ。期間中延べ466人が参加し、参加者からは「被災地のその後の復興を知る上で、とても重要な番組でした」「風化が進んでいる今、今後もこのような企画が折にふれ開催されることは大事だと思います」などの感想が寄せられた。

上映番組は、Aプログラム「被災地は、今」は、岩手めんこいテレビ『ようこそ!植音が響く丘へ～被災女将 笑顔が戻るその日まで～』、東北放送『千年後にとどけ 私たちの願い～被災地・女川 中学生の3年～』、仙台放送『祐梨、伝える～南三陸・語り部女子高校生～』の3番組。

Bプログラム「登壇者関連番組」は、岩手朝日テレビ『Believe 陸前高田・老舗醤油店 あの日からこれまで』、福島テレビ『福島と原発の50年～原発に身を削られる町・大熊町からの報告～』、NHK『明日へ—支えあおう—是枝監督×女子高生～震災3年 福島を描く』の3番組。

■5回目の震災セミナーを横浜で開催



公開セミナーは、3月22日、横浜の情文ホールを会場に、午前中は登壇者の制作・出演番組を全編上映、午後は番組のねらいや取材の苦労、被災地の現状と課題、震災番組に対するキー局と地元局の温度差、これからの災害報道などについて、2時間にわたって熱心なトークが展開された。

登壇者は、岩手朝日テレビ・佐々木貴報道制作局長、福島テレビ報道局・井上明記者、映画監督の是枝裕和さん、司会

進行は、震災シリーズ・セミナーを毎回担当している、放送作家の石井彰さん。

■被災地・岩手と福島の進まない復興の現実



岩手朝日テレビの佐々木貴報道制作局長がプロデューサーを務めた番組『陸前高田・老舗醤油店』は、陸前高田市の老舗醤油店が震災後も全社員の雇用を守り、醤油造りの再開を目指す苦闘を追った作品。「震災で壊滅状態となった翌朝、醤油店の親子が横倒しになった杉樽からもろみを小さなスプーンで削り取る作業が印象的で、この2人を記録していくことが必要だと思った」と長期取材の動機を語った。岩手の現状について「仮設住宅の暮しが長引き、災害公営住宅の建設が進んでいない。建物はピロティや子供が遊べるスペースもあり各年代層向けの設計だが、現在は安価で入居できる年金暮らしのお年寄りが多く、ファミリーや仮設店舗で店を営む世代は高い家賃で入居は難しい現実がある。市街地全体をかさ上げするための巨大ベルトコンベアや巨大防潮堤の整備は進んでいるが、そこに魂はこもっているのか、住んでいた人達が戻っているのかなど問題点は多い」と指摘した。

福島テレビの井上記者が取材した『福島と原発の50年～』は、原子力発電所がなぜ福島に建設されたのか、当時の関係者の証言とニュース映像で半世紀の歴史を検証し、平成26年日本民間放送連盟賞テレビ報道番組優秀を受賞した。井上記者は「原発の計画段階を詳しくは少なくなり、取材を断られた方もいた。カメラを回す前に何度も足を運び関係を作った。時間がかかったという印象が強い」と取材の苦労を語った。続いて今の福島の問題点について、「除染廃棄物を一時的に補完する中間貯蔵施設の地権者との交渉が難航している。約12万人の県内外の避難者への対応、子供たちの低線量被曝に不安を持つ保護者たち、会津では観光客を震災前の水準まで、いかに呼び戻せるかという課題もある。いろんな層の異なる課題が重なり合っている現状だ」と述べた。



■是枝監督の大震災との向き合い方



是枝監督は、制作会社の仲間たちと震災後の3月下旬、被災地に入った。「そこで崩壊の風景を目の当たりにした時に撮れなくなった。何を撮っても画になってしまう。目の前一面に人の営みが壊れてしまっている状況を、どう伝えたいののかを考え、目と口ではなく、僕が耳を傾けて彼らの声をすい上げるという形の番組作りを始めた。このNHK番組もその流れで出演した」と大震災との向き合い方を語った。NHK番組『是枝監督×女子高生～震災3年 福島を描く』は、福島で生活する女子高生が友人たちの生の声を記録する姿を描いた作品で、是枝監督が彼女たちの映像制作にアドバイスしている。「絵はぐちゃぐちゃで、音も取れていないが、でもやっぱりいいんです。僕は『整えなくていいよ』と言っただけ。僕には撮れないものが撮れている。だから意味がある」と番組制作の背景を語った。

■震災報道に対する東京キー局と地元局の温度差

進行役の石井さんから「今年の震災特番は、どの局も、陸前高田も気仙沼でも同じ映像が多かった。中継車も同じ場所にいる。NHKも含めてキー局と地元局との温度差を感じることはないか」との質問に、是枝監督は「東京の局も制作会



社も、もう震災ネタはいいよね、そろそろオリンピックじゃないの、という雰囲気になっている」と指摘した。井上記者は「福島でもそれは感じていて、だからこそ地元メディアとして、震災ネタを続けていかなければならない」と強調した。佐々木局長は、「3月11日は、どの局も午後2時から4時に特番を組む。リアルタイムで被災地を伝えたいのはわかるが、画になること、見せ方に重きを置く傾向はあると思う。でも、キー局がそういう目線で番組を作ろうとする意図は理解できる」と語った。

「今後の抱負について」の質問に、佐々木局長は「全国には被災地の現状を多面的にストレートで伝え、県内には希望がわくような明るい話題をお伝えしたい」、井上記者は「福島だけの問題ではなく、日本全体の問題、世界全体に広く俯瞰できるような番組を作っていけたらと思う」、是枝監督は「放送は社会の共有材なので、皆さんの目で、ある時は厳しく、ある時は温かく放送を育てて頂きたい」と各人が述べた。

公開セミナーには放送関係者や学生、市民など170人が参加し、参加者からは「震災の表面的な部分ではなく、地元の奮闘を知ることができた」「震災後のこれからを撮ることの大変さを感じた。だからこそ、震災映像をしっかりと残して欲しい」などの声が寄せられた。

■公開トークショー 第12回人気番組メモリー『オールナイトニッポン 70年代同窓会』

6月13日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る「人気番組メモリー」を開催した(共催・放送人の会)。今回は、1967年10月の放送開始以来、深夜ラジオの旗手として若者文化を発信し続けているニッポン放送『オールナイトニッポン(以下ANN)』を取り上げた。

- [登壇者] イルカ(シンガーソングライター)
つボイノリオ(パーソナリティ)
齋藤安弘(ラジオパーソナリティ)
藤井正博(元ニッポン放送ディレクター)
- [司会] 上柳昌彦(ニッポン放送チーフアナウンサー)



第12回となる「人気番組メモリー」の中で、ラジオ番組を取り上げるのは初めて。「70年代同窓会」にちなみ、まず



当時の世相のおさらいから始まった。前年の69年は学生運動がピークで、アポロ11号が月面着陸した年。70年代に入ると、大阪万博、札幌五輪、また王選手756号ホームラン等、懐かしいニュースが並ぶ。番組開始から74年までパーソナリティを務めた「アンコーさん」こと齋藤氏は、「若者向けの深夜放送は、TBSの『パックインミュージック』が67年7月にスタートし、『ANN』が10月。喋るのも選曲もレコードをかけるのも全部一人でやった。初めての試みだったので無我夢中だった」と振り返る。「鉛筆書きの選曲表を、席を外している間にレコード会社の人に書き替えられたこともある」という。また、深夜ラジオ制作者は放送局の垣根を越えたつながりがあり、文化放送『セイヤング』で土居まさる氏が最終回を迎えた時は齋藤氏がゲスト出演したり、『ANN』と同じ時間帯にTBSラジオの新番組が始まった時は、齋藤氏のオンエア中にTBSの担当者が訪ねてきて、「このたび裏をやることになりました」と挨拶されたこともあったという。

現在は主に中京圏で活躍するつボイ氏は、大学卒業後、名古屋の番組を僅か5か月で降板になってしまったという。ようやく次に声がかかったのは、ローカル局のラジオ番組だった。



ギャラは少なく、選曲も構成もすべて自分一人。オンエアを終えて、局から帰る自家用車で全国ネットの深夜ラジオを聞きながら、「いつか俺も絶対にここで喋るぞと思いながら運転していた」という。しかし

タレントとして東京の番組に採用されるのは難しく、放送作家としてラジオドラマのシナリオを書いていたのが縁で、77年に『ANN』のパーソナリティに採用された。下ネタが持ち味のつボイ氏は、「名古屋では絶対にやるなと言われていたのに、ニッポン放送に来たら下ネタをやってくれと言われて驚いた。『この時間帯は、NHKはニュース、文化放送は音楽だから、編成上ニッポン放送は下ネタしかない』と説明された」と会場を笑わせた。

『ANN』開始当時は、齋藤氏のようにアナウンサーがDJを務めていたが、その後様々なミュージシャンが担当するようになる。74年、その一期生でもあるイルカさんは、「ラジオの経験はあったが、喋りのうまいミュージシャンと一緒に出演だった。深夜3時から、しかも1人で2時間喋るなど全くの未経験だった」という。時間の感覚が掴めず、「2分間喋る」「イントロ15秒の間に曲紹介」といった指示にもなかなか慣れることができず、『「それでは皆さんさようなら」と言った後に、『まだ20秒ある!』と藤井ディレクターに怒られ、もう一度カフを上げて喋ったこともあった』と笑った。

イルカさんの『ANN』で好評だったのが「バカヤローコーナー」。リスナーが投稿で依頼した内容について、イルカさんがエコー付きで「バカヤロー!」と叫ぶコーナーは人気を呼び、「最初は葉書1枚か2枚だけだったのが膨大な数に増えていき、何度も叫んで喉が痛かった」とイルカさん。「文化放送の落合恵子さんのように、“品が良く美しいお姉様がお話する”という深夜放送のスタイルは自分には無理。いっそ逆を行って、夜中に怒鳴ってみるのはどうかというアイデアから生まれた」。今日のトークショーのために投稿を募集した中にも「バカヤローコーナー」宛ての葉書があり、「還暦を過ぎたけれど頑張りますよ!」と何十年振りかの「バカヤロー!」を披露した。



藤井氏は、音楽ディレクターとして入社し、イルカさんやつボイ氏をはじめ数々のミュージシャンと組んで永年『ANN』のディレクターを務めた。『ANN』のテーマ曲と言えば、ハーブ・アルパートの『ビターズ・スイート・サンバ』だが、1年間しか流れなかった『幻のビターズ・スイート・サンバ』がある」ということで、貴重な別アレンジを会場に流した。開局20周年を機に替えたと推測され



るが、齋藤氏は『「君が踊り僕が歌う時 新しい時代の夜が生まれる』というキャッチコピーを、このアレンジに乗せて入るのは難しかった」と苦笑した。藤井氏は「自分がADとして『ANN』に関わった70年代、多い頃は毎週2万通もの葉書が来て、とにかく全部に目を通そうと必死だった。幾人ものディレクターの下でADをやったので色々な仕事のやり方を学ぶことができたし、様々なミュージシャンと一緒に仕事できたのは幸運だった」と振り返った。

『ANN』に限らず印象的だったラジオのエピソードはというテーマでは、イルカさんは東日本大震災の日を挙げた。収録のためニッポン放送のスタジオにいたイルカさんは、突然の激しい揺れに恐怖でいっぱいだったが、その時ちょうど生番組を放送していた上柳アナの声がスピーカーから聞こえてきたのだという。「非常に落ち着いた温かい声で『今、地震がありました』というコメントをいつもどおりに話されていたのを聞いた時、すっと気持ちが落ち着いた。皆が右往左往している時に、馴染みのある声が聞こえるということが、人間の心にとってどれほど大切かを実感した」という。上柳アナは、「大きな地震の後は、必ず“災害にはラジオ”という話になるが、普段からラジオに接していないとスイッチの入れ方やダイヤルの合わせ方すら分からないし、ただでさえ災害でパニックになっている時に、知らない声がわあわあ喋っていても耳には入ってこない。どこの放送局でも良いから、馴染みの声を何人が作ってほしい」と訴えた。



つボイ氏は、名古屋で朝の生番組を21年続けている。「どんなに面白い、才能を持った人でも、1週間話し続ければその人の話は語り尽くされてしまう。それを21年間続けられたのは、リスナーがそれぞれの経験や知識、感性を届けてくれるからで、自分はイタコのように口を通してそれを読んでいるだけ」とつボイ氏。「名古屋には構成作家がいないので、初期の深夜放送のように全部自分でやっている。正午にオンエアが終わると、翌日のために夕方までお便りに目を通す。1枚1枚のお便りが番組を続けさせてくれている」と話した。

現在も番組制作に関わる藤井氏は、「リスナーとのキャッチボールが一番できたのが『ANN』。若い人にもっとラジオを聞いてほしいし、団塊の世代前後の層が楽しめる『大人のための深夜放送』を作りたい」と語った。生番組でレポートを担当している上柳アナも、「街に出て色々な人に話を聞いていると、人には様々な事情があることを実感する。自分たちは、そういった事柄をひとつひとつ汲み上げて紹介する媒介役。これからも、生放送という“ドキュメンタリー”を続けていきたい」と話した。

会場には、70年代に青春時代を送ったリスナーをはじめ、20代から80代までのラジオファンが集まった。生放送のため録音あまり残っていない中、貴重な公開収録や特別番組など当時の音源をふんだんに盛り込み、参加者は70年代を懐かしみながら喋りの達人たちのトークを楽しんだ。

■テレビが伝えた沖縄戦の傷痕 番組上映会

今年、終戦70年を迎えることから、当センターでは、番組上映会や公開セミナーなど戦後70年企画を開催する。

企画第一弾として、「テレビが伝えた沖縄戦の傷痕」と題し、6月16日～7月5日の期間、放送ライブラリー施設内において番組上映会と、『沖縄戦とひめゆり学徒隊』の



パネル展示を開催した。新聞各紙にも取り上げられ、会期中、大勢の来場があった。また、7月4日に公開セ

ミナーを開催し、番組制作者を迎え、戦争を伝えることの難しさなど、語っていただいた（公開セミナーの詳細は次号に掲載予定）。

企画第2弾として、8月11日～15日の5日間、戦争関連の公開番組を活用した上映会と、8月13日には公開セミナーを横浜で開催する予定。

■NHK広島放送局で原爆関連番組の合同上映会開催

原爆投下70年の節目を迎える広島で、この夏、NHK広島放送局と広島の民放テレビ全社が合同で、被爆関連番組の上映会を開催する。

上映は、放送ライブラリーで公開している番組を横浜からIP伝送でストリーミング送信する。番組はNHK、中国放送、広島テレビ放送、広島ホームテレビ、テレビ新広島の5局が過去に放送し、放送ライブラリーで公開中の番組の中から被爆、平和関連番組を選定した。開催は、8月8日～8月17日を予定しており、NHK広島放送局にあるハイビジョンシアター（100人収容）で上映される。

■広島平和記念資料館にサテライト・ライブラリーを設置

広島平和記念資料館に、放送ライブラリーの公開番組が視聴できる「サテライト・ライブラリー」を9月1日から設置する予定。同資料館の東館地下1階にある情報資料室に、番組視聴用のパソコンを設置、放送ライブラリーから送信する番組を一般の来館者に視聴していただけるようにする。

サテライト・ライブラリーの来館者による個別視聴方式は、昨年度実施した、長崎県諫早市の諫早図書館に次いで2カ所目であり、利用者が番組リストの中から希望の番組を選んで視聴する仕組み。資料館としては初めての試みであることから、まずは同館が選んだ5本程度の番組からスタートすることになっている。情報資料室では、原爆や平和に関する図書の閲覧や資料映像などを視聴することができる。

■TBSテレビ新入社員研修で来館

6月18日、TBSテレビ新入社員26名が研修の一環で、放送ライブラリーに来館された。施設を見学した後、各自が事前に設定した課題に従って番組を視聴するなど、熱心に取り組まれていた。また、希望者は同ビル2階にある日本新聞博物館も訪れた。

■西銘総務副大臣が放送ライブラリーを視察

7月1日、西銘総務副大臣が放送ライブラリーを視察された。8階の視聴ブースで番組を視聴された後、9階・展示ホールで開催中の沖縄戦関連番組の上映会・パネル展示をご覧いただいた。その後、10階の事務室で、放送ライブラリーの概要、番組が公開されるまでの権利処理などについて、役員からの説明を熱心に聞かれた。



■第1回理事会・定時評議員会で平成26年度事業報告、決算を承認

6月5日に開催された第1回理事会では、平成26年度事業報告ならびに収支決算、特定費用準備資金積立計画、経理規程の改定が原案通り承認された。また、平成27・28年度の放送番組収集諮問委員会委員、および委員長、委員長代理の委嘱をそれぞれ決定した。委員のうち、新任委員は、木田幸紀氏（NHK交響楽団理事長）、鈴木郁子氏（NHK放送文化研究所所長）、小根山克雄氏（信越放送代表取締役会長）の3名である。また、サテライト・ライブラリーおよび教育利用の本格運用に伴う「ライブラリー業務に関する基本協定書」の改定案が承認された。今後、民放連、NHK、ATPに説明し、ご理解を得たうえで、本格運用をスタートさせたいと考えている。

6月26日開催の定時評議員会では、監事の選任、ならびに平成26年度事業報告、収支決算が承認された。新任監

事は、井上樹彦氏（日本放送協会理事）である。

平成26年度事業報告の概要は以下の通り。

[平成26年度事業報告]

平成26年度は、24年度に決定した「向こう5年間の放送番組センター事業方針」、および当期事業計画に基づき、放送番組の分野における唯一の公共的アーカイブとしての認知度を高め、利用者増を図るとともに、サテライト・ライブラリー、大学教育における公開番組の利活用など、放送ライブラリーの機能の充実を図ることに注力した。

また、民放とNHKによる出捐金の段階的な削減に対応するため、主たる財源である基本財産の運用収益の向上を図り、仕組債の導入等により、2.3%の運用利率を達成した。